

『変身』

フランツ・カフカ

(E2 秋山權)

「朝、目が覚めると虫になっていた」という一節が有名な文豪、フランツ・カフカの代表作。

主人公のグレゴール・ザムザが突然虫に変身してしまうことから物語は始まる。ザムザ自身の行動、家族や周りの人たちの感情など、一人の人間が不条理に襲われたときの人間模様が描かれている。

現実にはあり得ない突飛な設定にもかかわらず自分に置き換えて考えたり、深い共感を呼び起したりとどこか身近に感じる。身の周りの人間関係を考えさせられる深い作品でありながら実存主義らしく深掘しないあっさりとした文体で非常に読みやすいです。ぜひ読んでみて下さい。



『IKIGAI: The Japanese Secret to a Long and Happy life』

Héctor García, Heather Cleary

(E科・准教授 秋田敏宏)

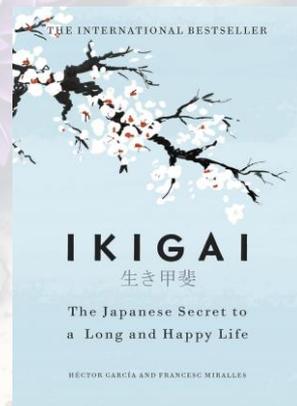
私は基本的に本をあまり読みません。インターネット上にある各種読み物をベースに、より深く知りたいという探究心を抱いたときに書籍を購入します。技術的な専門書のほかに日々生きていく中で己の人生観に関わるような書籍をよく購入します。今回は、Amazonでベストセラーになっている「IKIGAI」を紹介します。

日常であたりまえのことだと思ってやっていることが、海外の方から見ると日本人のより幸せに日々を送れることに感じているようです。そういった外から見た感覚というのを知ることができ、改めて自分たちに気づきを提供してくれます。

「生き甲斐」をもって人生を歩んでいきたいと思う人は多いと思います。Marc Winn氏による日本人がいう「IKIGAI」の説明から始まります。集合間の関係を表現するときに使われるベン図で説明されていますが、ここでは文章で簡潔に紹介します。4つの要素で構成されていて、「好きなこと (LOVE)」+「得意なこと (GOOD AT)」+「お金になること (PAID FOR)」+「求められていること (NEEDS)」=「IKIGAI」とのことです。最初の2つはつながりやすいかもしれませんが。私の場合、旅行が好きで計画を立てることが得意です。でも残り2つは該当していません。ちなみに「好きなこと」+「得意なこと」=「情熱」とのことです。「情熱」をもってやることは、時間に関係なくどんどん自分で進んでいけることでしょう。趣味や特技になるようなものです。皆さんの現在の置かれている状況が「IKIGAI」につながっているとよいですね(私は、いうまでもなく...)。「求められること」のために様々な分野の方々に接するようにしたいと心掛けるようになったきっかけの本でもあります。この考え方は、研究活動やアントレプレナーシップにも通じるものでしょう。

人生を楽しく生き抜いていくためのヒントになるようなことが書かれていますが、その部分はぜひ読んでもらいたいので内容の紹介は割愛します。後半は、ダイエットや日本食、ラジオ体操、ヨガや太極拳(日本独自ではないもの)などが紹介されており、日本人が長寿であることの秘訣のようなこととされ、トータルで幸福な生き方について書かれています。

外国の方から見た日本人の分析で、(自主探究ではなく)自己探求のためにも是非ともおすすめな1冊です。お気づきだとは思いますが、タイトルからわかるように英語で書かれています。それほど難しい英文ではありませんし、日本文化がわかれば飛ばし飛ばしでも内容を理解できるでしょう。また、海外の方に日本文化を英語でどう伝えればよいかという点でも参考になります。”In the here and now, the only thing in my life is your life. (いま ここにしかない わたしのいのち あなたのいのち “[相田みつを「にんげんだもの」より)。人生観の参考として、ご一読いただけると幸いです。



『下町ロケット-ヤタガラス-』

池井戸潤

(M2 林崎文乃)

下町ロケットシリーズ第四弾のお話で、前作のゴースト編の続編となっている。下町の町工場である佃製作所が農業用機械のトランスミッションの開発を行うことになった。しかし連携していた中小企業の裏切りや、大企業からの圧力、特許問題でトランスミッションの計画は難航してしまう。

一見とある下町の町工場を描いた社会派作品に見えるが、それぞれの立場からの視点が描かれていてとても奥が深い作品となっている。工業系の話題も多く出てくる作品なので、是非皆さんに読んでいただきたい。



『イワンの馬鹿』

レフ・トルストイ

(M5 熊谷洋飛)

ある国のある所に軍人のセミョーン、商人のタラス、そして馬鹿のイワンがいました。そこへ三人の悪魔がこの三兄弟に悪さをしようとします。セミョーン、タラスは罠にはまり、セミョーンは戦争で惨敗、タラスはお金を無一文にされました。しかし、イワンは馬鹿だったので悪魔に何をされてもなんとも思わず、むしろ悪魔がやつつけられてしまうことに。この本はトルストイによって創られたロシア民話です。単純明快ながら芸術性の高い世界観を楽しむことが出来ます。



NEWS LETTER

『隻眼の少女』

麻耶雄嵩

(E5 西田士道)

自殺する場所を求め寒村の温泉宿を訪れた大学生の種田静馬は、村の伝説の地で起こった少女の首切り事件に遭遇する。犯人の畏により殺人犯と疑われた静馬を見事な推理で救った水干姿の十八歳の隻眼の少女の探偵である御陵みかげ。静馬は助手見習いとして、みかげと共に被害者の屋敷へ向かうが、そこでは第二第三の殺人が待ち受けていた。大切なものを失いながらも難事件を解決したみかげ。だが、18年後に同じ現場で18年前を再現するような悪夢が……。

あなたは二転三転する推理に翻弄され続けた先に待っていた真相に、思わず嘘だと呟いてしまうだろう。これまでの推理小説の先入観に囚われてはいけな本格ミステリー、是非読んでいただきたい作品である。



『苦汁100%』



尾崎世界観

『苦汁100%』

尾崎世界観

(M3 伊藤俊大)

有名バンド「クリープハイプ」のボーカル、尾崎世界観による2016年7月から2017年2月までの彼自身の日記が本となったものである。尾崎世界観がどんなことにどんな感情を抱いて生活していたか気になる人は少なくはないのではないだろうか。この本を読んでみて、彼が日常に感じている楽しさや焦りなどの色んな感情を彼自身になって体験することができてとても面白い本だと思った。皆さんも尾崎世界観の日常的な感情に共感してみてはどうだろうか。

『月まで三キロ』

伊予原新

(E4 木村友香)

地球惑星物理学を収めた著者ならではの、科学をベースにした全6篇の短編集です。

人の生活や心情を基盤にしたストーリーに、自然科学の要素が取り入れられているのがこの作品の特色です。

どのお話も、人生に行き詰まりを感じる人が再生へと向かう姿が描かれた、背中を押してもらえそうな心温まる物語ばかりです。

ぜひ一度読んでみてください。



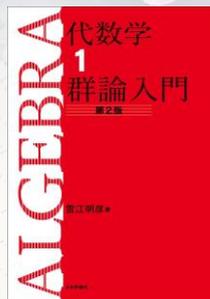
『52ヘルツのクジラたち』

町田そのこ

(L2 古川玲奈)

52ヘルツのクジラとは一他の鯨が聞き取れない高い周波数で鳴く、世界で一頭だけのクジラ。近くに仲間がいるはずなのに何も届かない、何も届けられない。

東京都から大分県の実験の町へ移り住んできた貴湖ことキノコは、ある日少年と出会う。その少年は家族に「ムシ」と呼ばれ、虐待を受けていた。彼を助けると誓ったキノコは、愛を欲する少年の届かない声を懸命に聞こうとする。



『群論入門』

雪江明彦

(E3 赤沼秋星)

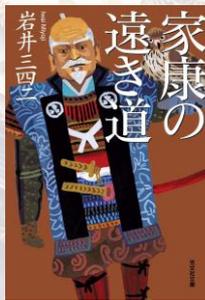
雪江明彦の名著である代数学シリーズの1冊目です。代数学の基礎である群論を豊富な例とともにわかりやすく書いています。群論をはじめとした代数学は方程式の解の探求だけでなく表現論、整数論に用いられ、さらに物理学や化学でも応用がなされています。工学のため数学ではなく抽象的な数学の入門として理学系に進む予定の人におすすめの一冊です。

『歴史をかえた物理実験』

霜田光一

(M4 清水志ノ伸)

私がこの本をブックハンティングで選んだ背景には2つの理由があります。一つは、純粹に自分自身の中の興味を刺激されたことです。もう一つはこれを読むことで先人が何を為して今を作りたげたのかを知れると思ったことが理由となります。



『家康の遠き道』

岩井三四二

(L1 春日翔太)

この本は、関ヶ原の戦いから九年後に將軍職を秀忠に譲り隠居した後も、徳川の天下を盤石にしていくために「守成」に力を注ぐ家康の晩年の姿を描いた小説です。隠居した後も諸外国との交易、キリシタン勢力、大阪の豊臣家など、様々な不安を抱えていた家康でしたが、手に入れた天下を無事に守り、保ち続けるために齢七十に迫ってなお政治や戦に積極的に関わり、奮闘します。是非一度読んでみてください。